

## 序

学長 中島 紀恵子

毎年の年報に目を通しながら、教育機関において歳月を刻むということの意味に想いを馳せているところです。あらためて、平成6年度新設時から本校のかたちを築いてきた故齋藤秀晃学長と教職員の皆様の日々の研鑽とご努力に敬意を表するものです。

故齋藤学長とお会いするようになったのは、大学新設が決まり、私が当大学の学長になることを受諾した後、設立準備室を中心に構想を練り、その具体化のための検討委員会が開催されるようになった平成12年の秋頃からです。大学創りに関しては、「口出しはしない」と決められていたようで、“よろしく頼むよ”“何か手伝うことがあればいつでも言ってくれ”と親しみのこもった笑顔で言われるのが常でした。数度、夜の部の意見交換会がもたれましたが、この時はもっぱら、「全国公立短期大学協会」で出会う看護系の学長と懇話したことなどを聞かせていただきました。私も知っている古い仲間を介在させながら、学長準備教育をしてくださったように思われます。先生の卒然の死去の知らせは、新潟県庁内で、大学入試委員会による合否判定会議があった2月21日のことでした。

先生ご自身が考えていたスケジュールは、任期を終えることで、最後の卒業式に出て学生を見送ること、「公短協」会長を任期まで続けること、また、「公短協」50周年記念誌の編集発行等々のことがありましたから、これが中断してしまうことなどは考えてもおられなかったように思われます。私にとっても、着任した後にはいろいろとご教示いただけるものと思い込んでいましたので残念でなりません。ひとつ、慰めになったことは、先生に「正五位勲三等旭日中綬章」が叙勲され、ご子息にお届けできたことです。

『公短協第44号』（平成14、3、30）では、先生が「公短協」の会長を引き受けられた平成12年5月から死去に至るまでの数多くの功績に対する特集で埋め尽くされております。また、今年5月に開催された総会においても、新しい会長より先生のご功績の紹介がありました。心から嬉しく思いましたのが、2代目学長としての責務に身の引き締まる思いです。

2年、3年次学生と専攻科生を世に送り、そして、短大同窓生のよりどころにもなる大学創りのためにも、いま一度謙虚になって、教員相互が教育内容の点検と開発のために力を合わせる必要があるように思います。また、すぐ始まる編入学の準備を始める必要があります。こうした中で、大学院創りの準備を始めていかなければなりません。

故齋藤学長が、毎年の年報に必ずといってよいほどに書かれているように、“我々に後退は許されない”を肝胆として、教育・研究の夢を膨らませて参りましょう。